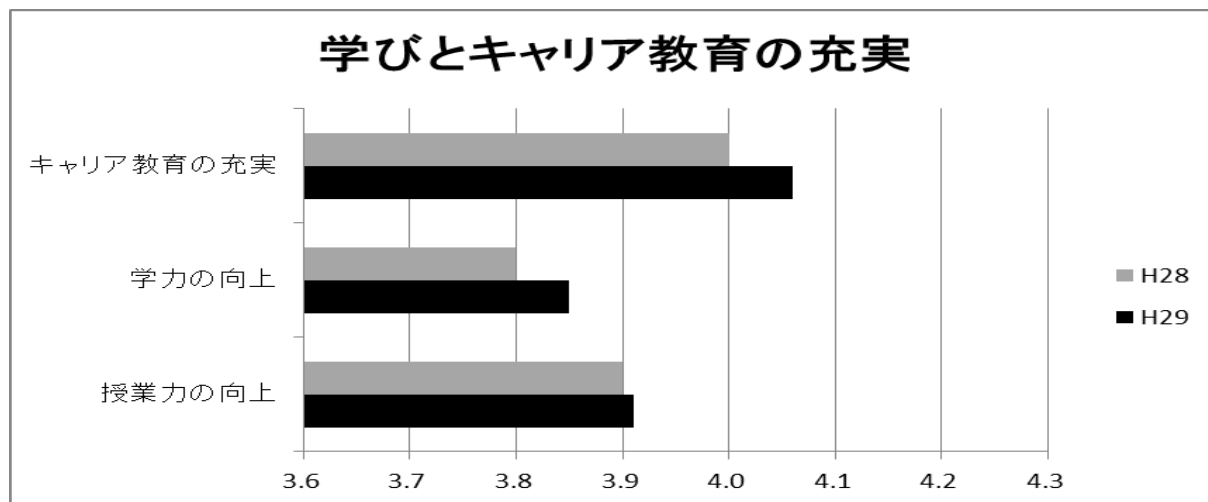


平成29年度 有馬高等学校 学校評価

— 「自己評価」結果報告と分析・考察等 —

重点目標1



【自己評価の分析・考察および今後の改善策】

〈総合学科部〉

総合学科では、「産業社会と人間」を中心に、人生のキャリアデザインを意識させること、コミュニケーション能力を向上させることを目標とした取り組みを実践している。これまでの取り組みに加え、「言語力ドリル」の朝学習が定着したり、「新聞読み解き講座」により生徒の社会への関心が高まったり、「課題研究ガイダンス」により3年次への導入がよりスムーズになったりなど、改訂が生徒の意識の向上につながっているように思われる。

来年度に向けて担当者間で意識のずれがないよう十分な打ち合わせや資料の共有を心がけ、授業実践がキャリア教育にうまくつながるように改善していきたい。

〈農業部〉

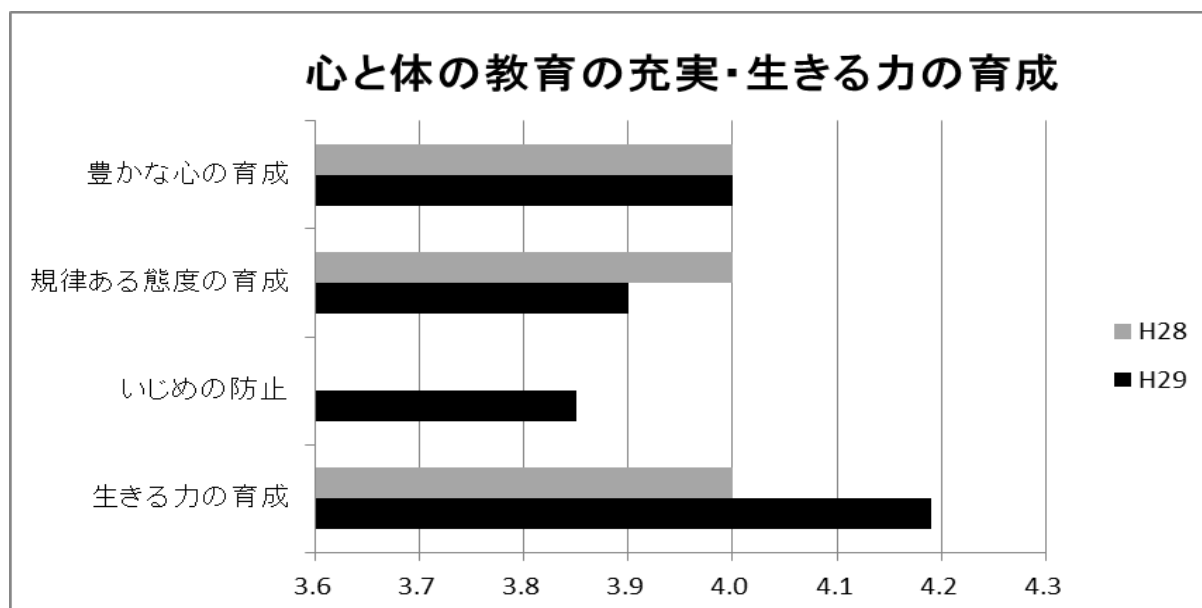
今年度も、外部（農業改良普及所、みどり公社、先輩農業者）と連携したキャリア教育を全学年で実践した。バスセミナーも継続し、今年度は兵庫県下で最先端のトマト工場（兵庫ネクストファーム）の見学を行うなど新たな取り組みも実践した。多様な進路を見据えた進路指導の中でも、農業を職業とした指導について、今後も実践していきたい。就農を見据えた指導は、長期的な展望にたったビジョンが必要なため、卒業後の追跡調査も含めて（進学者含む）今後の課題であるが、新規就農者を志す生徒や、新規就農した卒業生が出ている結果を考慮し、関係機関と連携して実践したい。

〈進路指導部〉

進路講演会や各ガイダンスは予定通り実施できたが、7月のガイダンスでは希望する大学にあまり参加していただけなかった。3年生は代替として元予備校講師による「難関大講座」を開講することはできた。個別の大学入試説明会は外部で実施されるので、次年度は「難関大講座」のみ実施を予定している。2年生12月の講演会は新たに大学・専門学校・就職別に行い、「3年生0学期」に向けての意識づけを図った。推薦入試対策として前年に続き外部講師を利用した「看護医療面接講座」を実施し、その効果もあって好結果が得られた。新たに「小論文対策講座」を実施しある程度の結果は得られたが、次年度は専門性を考慮し有効活用していきたい。

〈教務部〉（学力向上委員会・教育課程委員会）

生活実態・学習状況調査の結果やスタディーサポート・進研模試の結果を受け、事後の対策について各学年と連携を強化し、状況に応じた適切な指導につなげる努力をしたい。教育課程については、平成30年度入学生より総合学科は一部の演習科目を学校設定科目にし、柔軟な選択ができるように編成した。生徒のニーズが多様化する中でバランスよく科目を配置していく必要がある。また開講する科目については、その授業内容の更なる充実を図り、職員の一層の研鑽を目指していかなければならない。また少子化に伴う生徒数の減少も予想され、個々の進路や興味関心に対して教育課程上すべてに対応することが困難になっていく中での対応も今後は必要となる。



【自己評価の分析・考察および今後の改善策】

〈生徒指導部〉

委員会活動においては、各委員会で数年においてこれまで定着してきた活動内容を継承し活動してきた。それぞれの活動内容において新しいものが見られなかった。来年度にむけ活動内容を見直し生徒が主体的に活動できるよう目標の明確化や計画のより具体化をどのようにするかが今後の課題である。今年度で1年生に対する部活動全入制の取り組みは5年目となり加入率は定着してきた。今後は学年途中での転部希望生徒への対応や2・3年生になっても部活動を継続して実施する生徒が多くなるよう学校全体としての取り組みを考えるのが課題である。

〈総務・広報部〉

人権教育、国際理解教育ともに、工夫を重ね、内容を充実させることで、一定の成果をあげることができた。来年度に向けて、本年度の取組を継続するとともに、さらに発展させていきたい。人権教育の取り組みについては、自己評価結果「4.2」が示すように高い評価を得た。人権HR実施内容の工夫・改善、職員事前研修の充実、性的マイノリティにかかわる人権講演会が好評であったこと等が要因であろう。1月に実施した、「色覚異常」についての職員研修は、教職員の人権意識の高揚と指導力の向上という観点からも、たいへん有意義であった。国際理解教育についても、短期研修(本年度はマレーシア)に参加する生徒だけでなく、全校生徒を対象に報告会を実施したり、姉妹校訪問団を受け入れたりするなど、国際交流委員会を核として学校全体で取り組んでいる。来年度は、オーストラリアの姉妹校との交流事業が中心となる。種々の事業を通して、異文化理解を深めていきたい。

〈保健相談部〉

キャンパスカウンセラー2名体制が維持され、有効に活用されている。カウンセラーによる年に2回の職員研修会では、事例に基づき生徒の理解と関わりについて改めて考える機会となり、有効であったと思われる。各学年との情報交換も密に行い、職員が相談等を通して生徒の内面理解をし、支援する体制が整備されてきた。今後さらに、生徒に起こる多様化している問題について職員が適切に対応できるよう質の高い研修を計画していくことが課題であると考え。また、個々の事例について早期に適切に対応できるよう校内組織の連携をさらに重視する必要があると考える。

〈教務部〉

授業を行う上で教員・生徒ともに、規範意識を持った集団として学習する環境が整ってきている。生徒の授業の取り組み姿勢も問題はなく、まじめに学習できるようになっている。その中で主体的に学習に向かうことができているかという点が今後の大きな重点目標であり、自らの進路に照らし合わせて学習計画を立て、意欲的に学習に向かう姿勢を育成していきたい。

〈生徒指導部・学年〉

規律ある態度の育成に関しては、昨年の周年行事を通じて一定の成果と成長が見られたものの本年は全体として厳しい評価となった。今後は各学年と情報共有をさらに深めるとともに、新学期当初、各考査期間前後、長期の休み明け、等の生徒が不安定になりやすい期間に対する生徒指導体制を明確にすること。また、各学年や関係部署との連携をより密にして細やかな指導を具体的に実施することが重要である。さらに、学校行事や各種の委員会活動を通じて生徒が主体的に活動するなかで、生徒自身が「自らを律する態度」を育成させ生徒主体の学校生活が実現できるよう指導していきたい。

〈いじめ対策委員会〉

いじめ防止については、特定の職員が抱え込むことなく、チームとして共通理解路図り、組織的に対応することが必要である。今年度は一年を通じて認知数は多くなかったが評価としては厳しい結果となった。保健部を交え各学年間の生徒情報交換会やいじめ防止基本方針の改定、いじめ対応マニュアルを使用しての職員研修会の実施、生徒に対しては年間3回の記名式のアンケートを実施した。記名式のアンケートであるためいじめの実態が全てにおいて把握できてない可能性があるため、今後は無記名式でのアンケート実施も検討していきたい。

〈農業部〉

実習体験・販売実習を通じて生きる力の育成を図った。教師主導型の実践から、先輩が後輩を指導する実習にも取り組み、後輩達の模範となる態度を育成しなくてはならない。服装指導においても職員によってばらつきがあり、安全管理の徹底も含めて、全職員同じ目線で指導し改善していきたい。

〈総合学科部〉

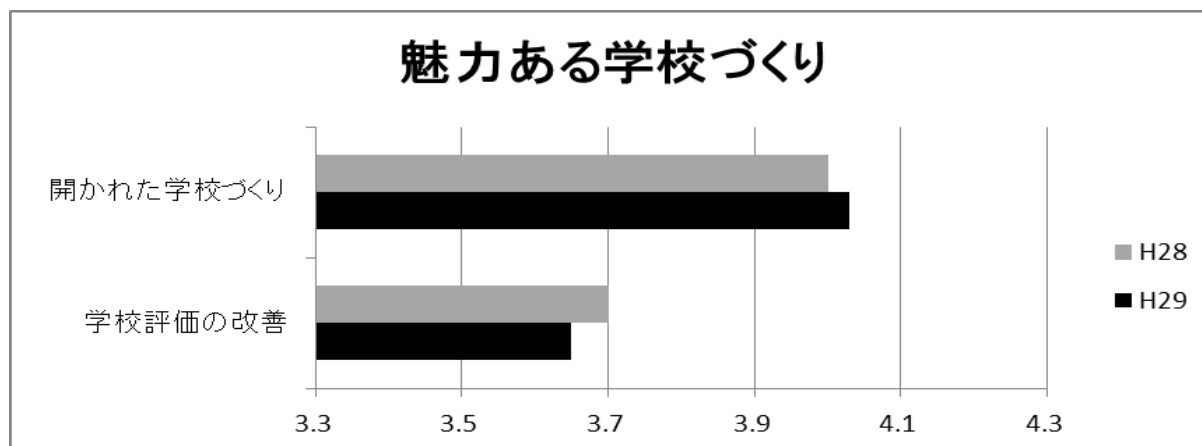
総合学科では「産業社会と人間」を中心とした、コミュニケーション能力を向上させる取り組みや各種発表会といった授業実践の中で自主的に行動できる生徒が増えている。学年が上がるほど、経験や責任感も増し、その割合は高くなる。1年次の指導をしっかりと行うことが、2年次、3年次の授業や行事での「自主的な学び」につながり、総合学科の様々な活動を通じて「生きる力」が育っていると考えられる。

入学する生徒の個性を尊重しながら、更に今後も「自分で考え行動する」態度を育てていく工夫を重ねていきたい。

〈進路指導部〉

進路指導部では、3学年就職希望者に対し、各自の適性に合った就職先を選択できるように、面談と企業説明・企業見学に力を入れて取り組んだ。課題としている定着率向上のため、内定後もビジネスマナー等の講座や課題を続け、入社に向けての準備を進めている。今後は、ハローワーク主催「キャリアシミュレーションプログラム」を開催するなど、外部のガイダンスを積極的に導入していきたいと考えている。また、生徒の自発的な進路選択を促すため、1・2学年での各種ガイダンスやインターンシップを見直し、正しい分野理解につながるよう検討していきたい。

重点目標 3



【自己評価の分析・考察および今後の改善策】

〈総務・広報部 HP・情報委員会〉

本校保護者を対象とした行事・授業の公開、中学校関係者へのオープンハイスクール、WEBサイトでの情報発信という3点において、概ね成果を上げることができた。

特にオープンハイスクールへの参加者が昨年度と比較して100名程増加したことは嬉しいことであった。しかし、年4回のオープンハイスクールの運営は、職員数が減少するなかで、負担が大きくなってきているのが現状である。本年度は、第3回オープンハイスクール（12月実施）を「学校説明会」として位置づけ、事前申し込み不要とするなど、職員の負担を減らすよう努めた。さらなる工夫が求められる。WEBサイトによるきめ細やかな情報発信も大きな労力を要する。全職員の協力なくしては成し遂げられない。この協力体制の構築が今後の課題である。

〈学校評価委員会〉

昨年度に評価項目の重点化の観点から評価項目数が精選されていたので、本年度は昨年度と同じ項目で評価した。ただ、昨年度の申し送り「いじめの防止」に関する評価項目を追加した。学校関係者評価委員会においても、学校紹介プレゼンテーションや本校の特色ある取組に関する会議資料の追加などを行った。しかしながら、昨年度と比較して評価点は若干下がっており、全体的に見ると評価が低いことから、学校評価がコミュニケーションツールとしての役割や教育活動、学校運営の改善にあまり活用されていなかったことがうかがえる。来年度は、学校評価の目的や意義を周知し、より良い学校づくりに活かすことができるように、職員全体の共通理解を高めていきたい。